

郊外住宅地における多世代交流に資する 居場所形成に向けた研究

研究代表者：立花 理駆

共同研究者：川西 由季奈・堺 香菜子・竹田 裕有子
中野 慶太・松田 葵

目 次

- 第1章 研究テーマをめぐる概況と目的
- 第2章 研究対象の特徴
- 第3章 小学生の生活実態調査
- 第4章 多世代交流に関するアンケート調査
- 第5章 結論

第1章 研究テーマをめぐる概況と目的

近年、郊外住宅地において、単独世帯化と少子高齢化が顕著である。居住者の高齢化が進行するにしたがって、地域活動の維持が困難になるだけでなく、地域内のコミュニティそのものについても維持が危ぶまれると考えられる¹⁾。高齢化が進行する中、持続可能な地域にするには、今後の地域を担う次世代である子どもの育成が必要であり、多世代循環型のコミュニティを構築することが課題となっている²⁾。

しかし近年、養護性や人間関係を形成する力が低下し、地域の大人などの他世代と日常的に関わる機会が不足している子どもが増加している³⁾。その背景には、3世代世帯の減少、塾・習い事による自然・体験活動の取り組み率の低下、匿名性の強い第二次的接触の増加、地域社会の希薄性などがある⁴⁾。子どもたちが日常的に他世代との関わりを持つには、多世代交流を促すことが必要である。

多世代交流は、「社会に存在する様々な資源や知識を高齢世代と若年世代の人々で交換し合い、個々人や社会の役立てるための意図的・継続的な仕掛け」⁵⁾と定義されている。高齢化や地域コミュニティの弱体化が進む郊外住宅地では、多世代交流を促すことで、社会ネットワークの拡大、地域コミュニティの強化、養護性の育成、生活満足度の向上などが期待できる。また多世代とのつながりを強めることで、子どもの地域への愛着を強め、高齢者の居場所形成も可能になると考えられる。郊外住宅地における多世代交流の事例を見ると、拠点を設けて日常的な多世代交流を促しているものがみられる。

郊外住宅地である奈良市西部の鳥見小学校区（以下鳥見地区）では、人口減少・単独世帯化の進行（約34%：平成22年国勢調査）や、各地から転入してきた人たちから構成するコミュニティであることから、多世代交流が難しい状況であることが推察される。

そこで、本研究では、「多世代交流の場・機会を設けることで、子どもの社会性の育成・地域の関係の希薄化改善をもたらし、持続可能なコミュニティ形成につながる」という仮説のもと、多世代交流の必要性や、効果を地域での学校外活動が求められる子どもたちの生

活実態を探るとともに、多世代交流の必要性や効果を明らかにする。また、郊外住宅地の特性や課題に対応した持続可能なコミュニティのあり方を考察し、地域における多世代交流の促しやすい居場所の実現に活かす。

第2章 研究対象の特徴

研究の主な対象地となる鳥見地区は、奈良市最西部に立地し、昭和40年代に当時の日本住宅公団が計画的に開発した住宅地を中心としている。丘陵地にあり、地区の最寄駅である近鉄奈良線富雄駅からは、上りの勾配がある。

奈良市保健福祉部福祉政策課の資料（校区別・住民基本台帳）によると、鳥見地区は、平成23年と平成28年を比較して、平均世帯人員は約2人で大きな変動はないが、地区の総人口は7390人から7252人と138人減少している。高齢化率は27%から31%と4ポイント増加しているものの、15歳未満の人口割合は13%である⁶⁾。特に、UR団地のある鳥見町4丁目は、15歳以下の子どもの割合は総人口のわずか8%（平成22年国勢調査）に留まっている。今後さらに少子高齢化が進行し、地域のコミュニティの維持が危ぶまれる。

鳥見地区には幼稚園や小学校、公園、公民館など、住民のための公共施設は存在するが、日常生活のための飲食店や医療施設、大規模な小売店舗は富雄駅周辺及び枚方大和郡山線沿いに集まっているが、地区内は専用住宅地であるため、このような施設に乏しい面がある。地区内の施設の中で、住民の交流の場になっているものとして、日常的に多くの講座やサークル活動などが行われ、様々なイベントの会場となる奈良市富雄公民館や、同様にイベントや講座などの住民が集まる催しが開かれ、カフェやフリースペースとして利用されている奈良市社会福祉協議会の「コミュニティスペース“まんま”」（以下「まんま」）などが挙げられる。

鳥見地区では子どものための地域ぐるみの取組みや、高齢者のための取組みが盛んであるが、全世代を対象とした世代間交流の機会が夏祭りなどに限られているため、同じような世代の人々が集まるに留まっている。鳥見地区自治連合会や鳥見地区社協、鳥見小学校

運営委員会などの組織が、「放課後子ども教室」などの地域教育活動や、地域イベントによって、住民の居場所づくりと世代間の交流の促進に努めているが、日常的な交流につなげることが課題である。そのため今後、これらの施設や組織が、今以上に住民の多世代交流を促進する場として発展していくことが望まれる。

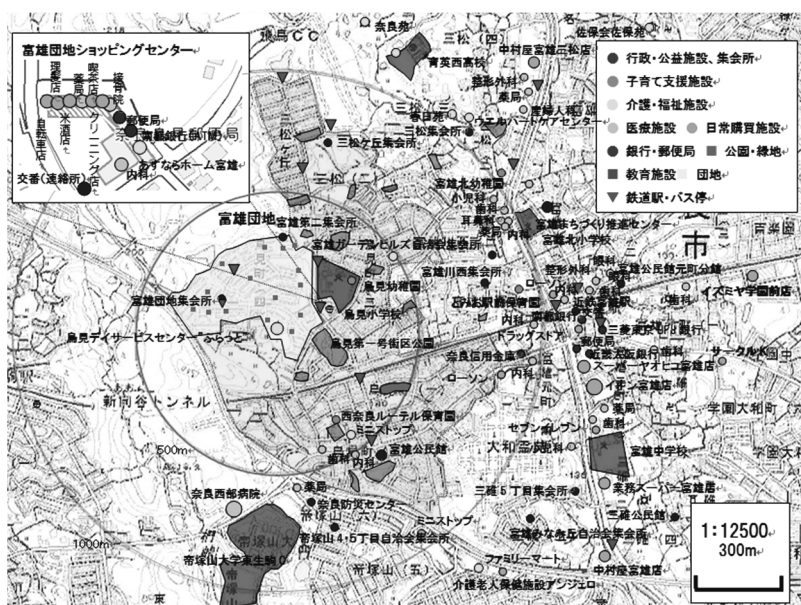


図2-1 鳥見地区 施設・公園分布図(同心円中心部が鳥見地区)

第3章 小学生の生活実態調査

本章では、小学生の生活実態を明らかにするために実施したアンケート調査をもとに、小学生にとっての地域の「居場所」や「愛着」等の考察を行う。この調査は、2016年11月22日、12月1日の朝学の時間に出席していた鳥見小学校児童（1年生～6年生）計13クラス、394人を対象に、放課後の過ごし方や地域との関わりについて尋ねたものである。本章は、その結果をまとめる。

(1) 回答児童の特徴

回答した小学生全394人についてみると、以下、表3-1のことがわかった。

表3-1 回答児童の特徴

合計 (n=394)	学年						性別		保護者の出身校		
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	男子	女子	鳥見小で ある	鳥見小で はない	わからな い
	20%	16%	15%	17%	16%	16%	48%	52%	20%	51%	27%

(2) 小学生の地域の「居場所」について

①放課後の過ごし方の特徴

まず放課後の過ごし方をみると（複数回答）、「自宅で宿題・勉強をする」「習い事」をして過ごすそれぞれ84%に対し、「遊ぶ」が55%で少ない。続いて遊び場所は、「自宅」が66%、「友だちの家」が49%に対し、「公園」が37%であった。（図3-1）

また学年別でみると、6年生までに放課後子ども教室に参加したことがある児童は53%と過半数を占めている。（図3-2）

以上のことから、児童たちは自宅で過ごすことが多く、高学年になるにつれて習い事が増えるため、遊ぶ機会が減少するといえる。

多世代との交流の状況を「地域の大人との関わりの有無」でみると、全体では「関わりあり」は32%で、「関わりなし」66%の方が多い。

また、地域の大人との「関わりあり」の方が「関わりなし」に比べ、「公園」や「友だちの家」で遊ぶ比率が高く、地域の大人との関わり

があることは、自宅以外の地域の居場所を持つことにつながる傾向がみられる。（表3-2）

表3-2 地域の大人との関わりの有無別遊び場

地域の大人との関わり の有無別遊び場	家	友だちの家	公園
関わりあり (n=126)	65%	53%	45%
関わりなし (n=260)	67%	47%	34%

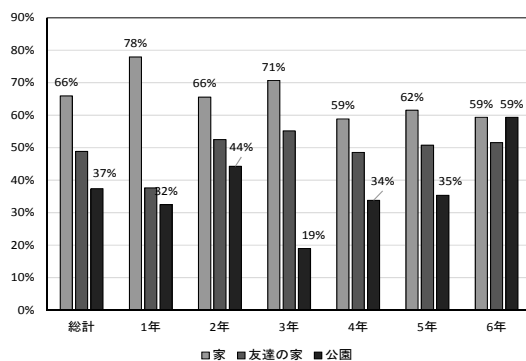


図3-1 学年別放課後の遊び場所

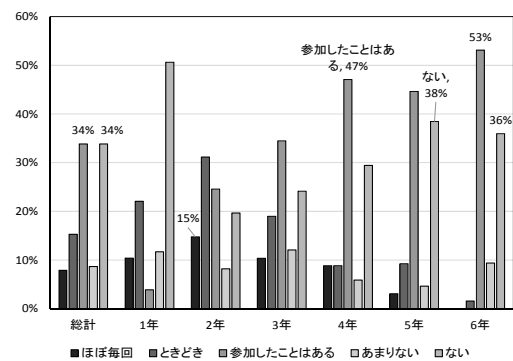


図3-2 学年別放課後子ども教室の参加状況

② イベント参加状況の特徴

イベント参加状況をみると、地域の大人と「関わりあり」の方が「関わりなし」に比べ、いずれのイベントも参加している比率が高い。地区イベントが地域の大人と関わりを持つきっかけとなっているものと思われる。(表3-3)

表3-3 地域の大人との関わり有無別
イベント参加状況

地域の大人との関わり有無別イベント参加状況	地区のイベントに参加	ふらっとのイベントに参加	地区のスポーツ・文化活動に参加
関わりあり(n=126)	94%	30%	36%
関わりなし(n=260)	87%	25%	26%

(3) 小学生の地域への「愛着」について

以下は、「地域の自慢できるところ」を地域の愛着と捉え、その意識をさまざまな角度から分析したものである。

① 地域の大人との関わり別特徴

まず性別学年別に地域の大人との関わりの有無についてみると、3年生は男女とも男子40%、女子61%と、最も地域の大人と関わりがあることがわかった。また、同様に「地域の自慢できるところ」をみると、「自慢できるところあり」は、女子合計38%に対し、男子は25%となっており、女子の方が地域の大人と関わりがある児童の比率が高い。

以下の図より、地域の大人との「関わりがあり」の方が、自慢できるところを持つ傾向がある。また、地域の大人との「関わりあり」の方が、「地域の自慢できるところあり」が42%と、全体の32%よりも比率が高い。これらの点を踏まえると、大人との関わりが地域の愛着を高めているものと思われる。(図3-3)

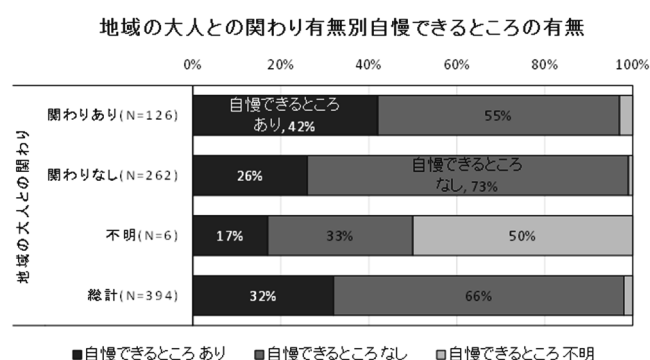


図3-3 地域の大人との関わり有無別
地域の自慢できるところ

② 遊び場種類別特徴

公園など外で遊ぶ生徒の方が自慢できるところを持つ傾向がある。この結果より、家の外で遊ぶことが地域への愛着を高めていることがいえる。(表3-4)

表3-4 遊び場種類別
地域の自慢できるところ

遊び場	地域に自慢できるところがある
公園で遊ぶ	39%
家で遊ぶ	31%
友達の家で遊ぶ	32%

第4章 多世代交流に関するアンケート調査

多世代交流イベント参加者の地域への愛着度やイベントの効果を明らかにするために、28年7月～12月に「まんま」において実施した計5回のイベント参加者を対象に、イベント後、アンケート調査を行った。本章ではそのアンケート結果をまとめている。なお、「まんま」は平成26年から奈良市社会福祉協議会が、「安心生活創造推進事業」として始めた「いい

ばしょづくりプロジェクト」により地域の交流の場として、富雄団地の幼稚園を改修して設けたスペースである。各回の調査項目としては参加者の属性、参加のきっかけ、イベント参加歴、鳥見地区に対する意識や鳥見地区への愛着度などがある。

(1) 参加者の特徴

まずアンケート調査に協力してくれた参加者の年代を見ると、全ての回のイベントに多世代の参加があり、交流が行われていた。参加者の中で一番多い年代は小学校低学年が24%であり、次いで小学校中学年が16%という結果となった(表4-1)。第3章の小学生アンケートから、小学校低学年の放課後の遊び場として「家」以外の場所が少ないが(図3-1)、それに比べると、「まんま」では、イベントの回を追うごとに小学校低学年の参加者の比率が増えている。その理由としては園庭があること、大人がいることなどが挙げられ、「まんま」の居場所としての役割の定着が伺える。

イベントごとに見ると「富ウォークイベント(万華鏡作り)」、「鳥見鉛細工工房(鉛細工作り)」、「おやつぎょうざ作り&むかしあそび(餃子作り・坊主めくり)」などの子どもでも簡単にできる料理や工作のイベントであれば、子どもとその親や高齢者など、多くの参加者がみられる。「とりみ魅力発見ツアー」はまち歩きを行うイベントであるが、幼児と高齢者よりも小学生の参加が多い。また、男女比はどの回でも女性の比率が高い(表4-1)。

表4-1 参加者の特徴

参加者特徴	年齢							性別		
	幼児	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	30代	40代	70代	男	女	不明
合計(n=50)	10%	24%	16%	6%	10%	12%	10%	16%	78%	6%
1.富ウォークイベント(n=9)	0%	0%	0%	11%	11%	11%	11%	22%	44%	33%
2.鳥見鉛細工工房(n=12)	25%	25%	18%	0%	8%	17%	8%	17%	83%	0%
3.とりみ魅力発見ツアー(n=13)	0%	31%	31%	0%	15%	8%	8%	8%	92%	0%
4.おやつぎょうざ作り&むかしあそび(n=10)	20%	30%	10%	0%	10%	20%	10%	30%	70%	0%
5.鳥見オリジナルマップを作ろう(n=6)	0%	33%	17%	33%	0%	0%	17%	0%	100%	0%

参加者住所は徒歩圏が多く、気軽に来場できる範囲での参加が多かった。また、団地内よりも団地外の戸建て住宅などの住居者の参加が多い結果となった(表4-2)。

表4-2 参加者住所

	近所 徒歩 (団地内)	近所 徒歩 (団地外)	近所 徒歩 不明	近所 不 入	近所 バ 用車	近所 自家 他	近所 その 他	その他 奈 良市内	その他 奈 良市外	不明
合計(n=50)	16%	40%	10%	24%	0%	4%	4%	2%	0%	6%

(2) 多世代交流イベントの参加の感想

イベントの満足度をみると、満足が86%と多くの参加者に満足してもらえた結果となった。また、やや満足、普通は「2.鳥見飴細工工房」で多くみられたが、飴細工が子どもには難しかったという意見があったことから、興味のある内容に加え、子どもでもできる簡単なものがイベントに求められているものと思われる。

また、今後イベントに参加したいかという質問では98%の参加者が「したい」と回答し、多世代が触れ合うことができる継続的なイベントへの参加意向が伺える。

表4-3 満足度

満足度	満足	やや満足	普通	不明
合計(n=50)	86%	6%	6%	2%

(3) 鳥見地区に対する意識(評価)

鳥見地区に対する意識についてみると、第3章の小学生の地域に自慢できるところが「ある」の回答が約1/3であったのに対し、多世代交流イベント参加者の70%が「ある」と回答しており、多世代イベント参加者は地域への愛着や誇りを持っている人の比率が高い。

また、具体的な内容(自由回答)としては「地域イベントの良さ」が一番多く挙げられ、鳥見地区で地域イベントが多く実施されていることが評価されている。全体を通してソフト面での良さが地域の良さとして、多く回答されている。これを世代別にみると、子どもは遊び場所がある、イベントが楽しい、人が優しいなどが多いのに対し、大人はイベントが充実している、安全パトロールがある、景色が良いなどが回答として多く挙がっている。

表4-4 鳥見地区のいいところ

	ある	ない	不明
鳥見地区いいところ	70%	20%	10%

表4-5 鳥見地区のいいところの具体的な回答

	緑の多さ、 景観の良 さ	生活環境 の良さ	地域イベ ントの良 さ	コミュニ ティの良 さ	居住者の 良さ	住み慣れ ている	その他
具体的な内容 (複数回答)	12%	12%	26%	8%	6%	2%	12%

「とりみ魅力発見ツアー」「鳥見オリジナルマップを作ろう」のイベントを通して再発見した鳥見のいいところについて、84%の人があると答えた。また、具体的な内容としては、とりみ魅力発見ツアーで町内を歩いたことから、道路が整備されているなどの町の美しさ、訪れた施設などが挙げられている。またイベント場所である「まんま」の回答も多かったことより、今回開催した計5回のイベントが参加者の地域への愛着度や誇り、居場所としての「まんま」の認知度の向上に貢献した可能性も考えられる。

表4-6 再発見した鳥見のいいところ

	ある	ない
再発見した鳥見 のいいところ (n=19)	84%	16%

表4-7 再発見した鳥見のいいところ具体例

- ・道路が整備されている
- ・展望台がある
- ・みんなが町を綺麗にしている
- ・「まんま」がある

第5章 結論

現代社会において、特に郊外住宅地では住民同士をつなぐコミュニティを再構築し、持続可能なものとするのが社会的な課題となっている。鳥見地区では、子どものための地域ぐるみの取組みや、高齢者のための取組みが充実している。しかし、第1章の仮説に基づくと、様々な世代を介する多世代交流と、それが日常的に成される場・機会となり得る住民にとっての居場所の実現が、コミュニティの再構築のための課題となった。

本研究での調査から、「友たちの家」や「公園」を遊び場として挙げる子どもがおり、そのように自宅以外の場所を居場所とし、地域のイベントや活動にも多く参加する子どもの方が、そうでない子どもより大人との関わりが多く、地域に対する誇りや愛着も多いことがわかった。このことから、子どもが家族や教師以外の様々な世代の大人と地域の中で交流することは、地域との接点を増やし、社会性や地域への愛着を養うために重要だと言える。また、これらの要素は今後の定住意向に結び付くことが期待される。以上のことから、地域において多世代交流の場・機会を設けることは、子どもの社会性の育成や持続可能なコミュニティ形成に寄与する可能性があると言える。

しかし、多世代交流の場・機会に着目すると、現在の住民同士の交流の場として、夏祭りなどのイベントや、様々な催しが行われる富雄公民館などの施設が挙げられるが、どれも日常的な多世代交流の場とは言えない。今後望まれるのは、夏祭りと同じように多世代が集えて、かつ手軽に継続できるイベントや、日常的に多世代が利用できる交流の拠点となり得る居場所だと考えられる。そのような役割が期待されるのが、子どもたちの遊び場であり、誰もが利用できる「公園」ではないだろうか。さらに、我々の活動の結果から、「まんま」も新たな居場所になり得ると考えられる。このような誰にでも開かれた場所に日常的に多世代が集う機会や仕組みを設けて継続していくことで、さまざまな世代の住民同士をつないで地域の関係の希薄化を改善し、持続可能なコミュニティを築くことが大いに期待できる。

今後の課題としては、男性の地域参加の促進が挙げられる。調査から、地域との関わりを多く持っているのは、子どもから大人まで全体的に女性である。世代だけでなく性別の垣根も越えた、より包摂的な取組みが求められるだろう。

【参考文献・資料】

- 1) 角野幸博、2015年、「郊外はどのように再編されるのか—研究の背景・目的・方法」、公益社団法人都市住宅学会関西支部、『駅から始まるコンパクトシティ形成促進方策に関する研究 調査報告書』
- 2) 内閣府、2015年、『高齢白書』
- 3) 文部科学省、<http://www.mext.go.jp/>
- 4) 斎藤嘉孝、2010年、『子どもを伸ばす世代間交流』、勉強出版株式会社
- 5) 草野篤子、2010年、『世代間交流学の創造』、あけび書房
- 6) 奈良市保健福祉部福祉政策課、2016年、「校区別・住民基本台帳」